九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

海岸堡

服部，英雄
くまもと文学・歴史館：館長

https://hdl.handle.net/2324/1932060

出版情報：2017. 福岡県教育委員会
バージョン：
権利関係：

海岸堡 Beachhead

服部英雄

福岡県は筑前・筑後・豊前それぞれに海を持つ。海との関わりが特色のひとつといえる。たとえば周防・長門あるいは肥前・肥後より、海から船にて攻められることは、しばしばあった。攻撃側は海岸堡を確保しようとするし、防衛側はあらかじめ海岸堡とされる可能性のある山に築城し、それを防いだ。

高さのある山を確保できれば、弓矢や投石、また鉄砲戦にも圧倒的に優位に武器が使えた。弓の射程距離が６０メートルだとして、この距離を挟んで低い側は有効な射撃ができず、高い側は、引力を味方にして強力な弓矢を射ることができた。山にいれば、つぎの補給・支援部隊がくるまでの占領が容易となった。

先の大戦で、中国戦線にて少人数からなる徴発隊に参加し、中国側兵士に包囲された経験を持つ元日本兵から聞いた話によれば、「山に上がりさえすれば助かる。上を向けた鉄砲は当たらない。伝書鳩を飛ばして本隊の救援を待つ」、とのことだった。同じ兵力なら高低差で優劣が決まった。高さこそが防禦の基本である。三角州等高さがない地での築城では、石垣や建物で、必要な高さを確保した。

攻防戦は海岸堡 Beachhead の確保にある。海岸堡の典型は文禄・慶長の役での倭城である。最初に豊臣軍が攻略したのが釜山湾岸にあった釜山子城で、攻略に成功して日本側の拠点になった。敗色が濃厚になった慶長の役に、海岸に面して築城された倭城も典型的な海岸堡であるが、通常の攻撃的な側面よりは防衛的な側面を持っていた。倭城の城域には港が含まれる。他の海岸堡より友軍の補給があれば、たやすく落城はしない。海岸沿いの西生浦倭城、機張倭城、蔚山倭城、熊川倭城はその典型で、海の干満の影響を受ける洛東江沿いの竹島倭城、亀浦倭城、弧浦里倭城、梁山倭城なども海岸そのものに位置するとはいえないが、広義の海岸堡といえる。

寛永十四年の天草島原の乱で、島原城がキリシタン一揆に包囲されたが、「陸路は敵に成候故、船にて参候」（『原史料に見る天草島原の乱』、００４４佐野弥七左衛門覚書）とあって、城内の一角に港が確保してあれば、連絡・補給・支援が可能であった。

海こそ自由な通路であった。攻撃側も海からくるが、防禦側も海を最大限活用した。

福岡県内の海岸沿いの城はいずれも海岸堡としての本質を持つ。以下文献にあらわれるものを中心に、紹介したい。

なお海岸堡とならび橋頭堡 Bridgehead という言葉もよく使われる。本来は領国境に橋以外に通路がない場合、橋を渡った向こう側に築く陣地のことであるが、海岸堡と同じ意味での攻撃拠点の意味で使われることも多い。

今津の港と後背地・本岡城郭、水崎城、柑子岳城

足利尊氏の袖判がある文書があって、筑前国本岡城郭を松浦佐志披に与えると記してある（観応元年・１３５０・九月十一日有浦文書）。

　　判（足利尊氏）
下　松浦佐志披蔵人披
可令早領知筑前国本岡城郭同国志登社領家同地頭職（以下略）

本岡城郭とあるが、筑前の本岡ならば志摩郡元岡以外には思い浮かばない。ともに領知せよとされた志登社については、元岡に隣接する太郎丸に志登宮という小字名がある（明治十五年小名字調）。太郎丸（村）の西に隣接して志登（村）があるけれど、志登社は太郎丸に属していたのかもしれない。なぜこの本岡（元岡）が、村としてではなく、城郭として松浦佐志氏に与えられたのだろうか。

松浦佐志氏は松浦を冠し、「披」という一字名を名乗っているように、海賊松浦党の一員である。その根拠地は肥前国松浦郡の佐志（唐津市佐志）と考えられる。水軍だから志摩郡へは船で来たことであろう。元岡は今でこそ内陸地のように見えるが、その前面の耕地には古新開、新開、開といった字名が多く、干潟を小さく仕切りながら開田したものである。開田以前、南北朝時代であれば満潮時には、ほぼ自由に航海できたし、干潮時でも干潟内の河川と支流は航行できた。元岡・太郎丸間の瑞梅寺川支流を盲川という。松浦党であれば、海図的な知識はあった。足利尊氏は今津瑞梅寺川干潟（前海という）の制海権を確保するために、盲川より海につながる本岡城郭、ならびにおなじく前海に面する太郎丸と推定される志登社領家同地頭職を松浦党に与えたのであろう。

元岡周辺・九州大学新キャンパス内にはいくつかの城跡がある。そのうち桑原地域の大神城（外山城）、松隈の志摩城、松隈城（馬場城）は元岡管内ではな

い。元岡に属する明確な城山として水崎城跡（旧元岡村字水崎、標高８０メートル）のみがある。この山には土塁や壕のような遺構はないが、南から遠望すれば頂部および西に一段下がった一角が水平に造成されていることが確認できる（本書・筑前２、２１６頁)。明治３７年海図には分銅山と山の名前が記入されている。海から見れば、分銅の形状のように、上が水平で縁が切り立っていたようだ。『筑前国続風土記拾遺』に「山上に平地有。縁有て周れり」とある記述もこのことを裏付けており、幕末のころには切り立った縁が観察できたようだ。九州大学新キャンパス内に保存されている。

この城は今津湾周辺、志摩郡東部におけるきわめて重要な戦略的な地位を占めており、いくどとなく争奪戦がくり返された。水崎合戦および水崎城衆（水崎人数）が登場する文献史料は 8 点もの多数が残されていて、そのあらましがわかる。由比重富文書の年欠十一月廿九日大友親綱感状（史料を所収する刊本については同上２９３頁）は、水崎城衆中に宛てられたものである。

今度於水崎城面々粉骨之由、其聞候、喜入候、然者敵陣退散之由、常陸守所より注進候、大慶此事候、弥当城事、用心以下可被本走候、其段高崎尾張守所へ申合候之間、閣筆候、恐々謹言

十一月廿九日　親綱（花押）

大友親綱が大友家の当主であった期間は永享三～十一（１４３１～１４３９）の九年間で、嘉吉四年（１４４４）卯月五日の史料に高崎尾張守源棟治が見える（柞原八幡宮文書・編年大友史料＋２４５)。年欠だが貞和二年（１３４６）頃とされる角違一揆の合戦奉行人に「高崎尾張守」がみえているが（武家家法Ⅱ４−４６頁)、世代からいって先祖で襲名があった。永正四年（１５０７）一月二十五日には水崎合戦があった。「水崎古城麓合戦」ないし「水崎防戦」と呼ばれている。攻めかけられて麓にて防衛したらしい。大友側の是松新兵衛が軍功を挙げたが、しかし大友側の西徳王丸父親、さらに松隈七郎父らが戦死したことがわかっている（児玉韞採集文書・７−１０６、是松氏所蔵、東大史料編纂所 DB、麻奈古村大光寺文書)。水崎城衆の犠牲が多く、勝利し得たかどうかは不明である。

（享禄四年・１５３１）十一月十二日大内氏奉行人連署奉書によれば、水崎人数が原田領分・王丸兵庫允（大内側）を攻撃した。城をめぐる攻防戦ではない

が、「水崎人数」（水崎城に配置された軍勢）が原田陣に攻撃をしかけていた（児玉韞採集文書・王丸文書、２−５６、東大史料編纂所DB、『筑前国怡土庄史料』）。

このように敵対する大友側にも大内側にも、双方の史料に水崎城が登場する。水崎城は一五世紀前半以来百年に亘って軍事拠点として機能し続け、城の攻防戦を二度も経験した要害であった。よってこの城こそ、足利尊氏が与えた「本岡城郭」であり、最大の水軍・松浦党を頼んで守らせた城郭だと推定できる。であれば「本岡城郭」＝水崎城は１３５０年、南北朝初期以来２００年間、継続して機能した重要な城郭であった。

この軍事枢要地を押さえれば、港湾都市である今津を掌握できる。仮に今津に敵が上陸しても、海陸双方から反撃ができた。今津には臼杵端城（標高１５、７メートル）と鷺城があるから、双方にて海岸堡を構築できたが、いかんせん水崎城に較べれば標高ははるかに低く面積も狭かったから、収容兵力も少なく、軍事的な安定性には欠けるところがあった。また毘沙門山も、浜崎山も適地であったが、なぜ、そちらに城が構築されなかったのかはわからない。今津干潟・前海の最奥にあって、比高８０メートルの水崎山（分銅山）が最適の海岸堡とされたことは古文書史料に明確であった。

水崎城は長期の軍事拠点であるわりには、城郭としての造作には顕著なものがないが、これは弓矢や投石を主兵器としていた時代には、山の高さがあれば十分に防衛機能を果たす事ができたからである。むろん雨風をしのぐ建物は必要であったから、山上平坦地には建物が数棟たって、さらに平地が不足すれば、懸け造りで斜面に柱を立てて建物とした。水は不可欠だったから井戸を掘ったと推測するが、おそらく地下水脈に当たらなかっただろうから、山麓のしみ水を利用したものか。近世の城のような、主郭を死守する思想はあまりなかったらしく、山麓の主戦場で勝敗を決している。享禄頃までは水崎城のような造作のほとんどない城でも十分に防衛機能を発揮できた。

ところで享禄以降、水崎城は史料に登場しなくなるが、替わって登場するのが、柑子岳城である。水崎城の機能が完全に消えたとは考えがたく、文献には登場しないといっても、城兵が置かれた可能性はあるが、拠点としての地位は柑子岳城（二五四・五メートル）に移った。文書に好士岳とも書かれたのは、好字の使用である。

村田文書・年欠四月廿八日森繁宣書状（写）によれば、

敵城柑子岳只今酉刻落城候条、則時各至其境、可有出陣候

とあって、「只今酉刻」（夕方６時頃）に落城、と臨場感がある。敵城柑子岳とあるのは大内側のもので、繁宣については裏に「森美作」とある旨、注記がある。宛先は基肄郡・養父郡であるから、九州探題領であり、繁の字は九州探題渋川氏の通字で、森美作守繁宣は探題渋川尹繁より繁の一字を得ている（本史料は、『新修鳥栖市誌』中世編所収）。森繁宣は境まで出陣せよ、故参（古参）当参（新参）によらず、早く馳せ参れ、と指示を出した。朝から攻めて、夕刻に落城したらしい。一気に攻めるべく、領内の武士に指示を出した。このように柑子岳城の動向は肥前にまで影響を与えるものであった。

天文二年（一五三三）七月一日の是松氏宛臼杵親連知行預ケ状（児玉韞採集文書、前掲）によれば、今度の「好士岳」の難儀などにおける忠節の賞により、所領が預けられている。これは大友方史料である。難儀とあるから落城したのであろう。

（同四年）七月十日大内氏奉行人連署状（同児玉韞採集文書、東大史料編纂所DB）には梅月八郎左衛門尉に宛てて、大内家家中よりの以下の書状が出された。

当御城普請、従去天文三年正月三日、至同四年二月四日毎月三ヶ度宛内廿一ヶ度不勤之由、仁保宮内少輔御目録注進、不参以之外之儀ニ候、お以後者無懈怠可有其沙汰候、猶於油断者一段可被仰出候、恐々謹言

七月十日　　（＊杉）　興重　判

　　（＊弘中）興勝　判

梅月八郎左衛門尉殿

大内方志摩郡代であった仁保宮内少輔の注進によれば、柑子岳城普請（＊土木工事）を天文三年より同四年にいたるまで、毎月三回宛勤めるはずだったが、うち二十一回が不勤であったとして、もってのほか、と咎められている。3回×13ヶ月＝39回（回）のうち21回だから53％を勤めていない。だが城の普請は一年と一ヶ月、継続して行われていた。現在の城の形＝遺構はこうした普請事業を受けた結果のものである。

「続風土記」に本丸跡は「城の上」と呼び、長さ六〇間・横八、九間ほどとある。標高２５４、４メートル、遠くから見れば、平坦に造成されていること

が一目瞭然なのだが、山頂に上がってみると、意外に狭く細長い。６０×８はよほどに狭いと実感できる。水平面といっても、完全なる平坦地ともいえず、緩やかな斜度があるが、当時はこれで十分であった。その下の曲輪を二の丸跡とし、「下城の上」と呼ぶ。長さ四〇間・横二〇間ほど、こちらは広いし、相当に平坦な感じがする。また北西にももうひとつ山頂がある。三角点のある本丸より３０メートル程低いが、比高２２０メートルはある。小田観音堂や北の海上から見れば、柑子岳の一部をなすことは明瞭で、ここを城地に取込まなかった、とは考えにくい。たしかに視認できる遺構はないが、水崎城同様に建物等があったと考える。柑子岳は、明治３７年海図では草場山となっている。地籍は草場のみならず、東側半分は今津地内で、北も小田に及ぶ。一帯でもっとも大規模な海岸堡であった。なお『風土記』に南方三町ほどの所に陣尾と呼ぶ山があって、原田氏が当城を攻撃した時の陣所とする。陣尾（じんのお）は標高１００メートルの山で、上がれば驚く程、間近に柑子岳を望むことができるが、残念ながら一帯の土取りが進んでおり、どのような遺構があったのかがわからない。向城の典型である。

沓尾・蓑島

文亀元年（１５０１）閏六月二十四日大友軍は仲津郡沓緒崎（沓尾崎）における合戦で、大内方仁保護郷らの軍勢を破った（七月十三日大友親治感状、『大友家文書録』、同年八月三日仁保興棟合戦注文、『萩藩閥閲録』）。

この沓尾には陣山の地名がある。陣が置かれたことに由来しよう。これも典型的海岸堡である。

天文二十一年（一五五二）十一月の豊前国「津濃熊庄」名寄帳（平賀家文書・『大日本古文書』）に津隈庄の年貢を蓑島の藤左衛門尉の舟が周防小郡に搬送したとある。永禄四年（一五六一）九月六日、同月二十八日には蓑島で合戦が行われ（同年一〇月一〇日「児玉就方軍忠状」『萩藩閥閲録』三）、十一月に大友軍が敗走すると村上水軍が蓑島を攻撃、大友方の船十艘を敗った（同月九日「毛利隆元感状」『萩藩閥閲録』一）。天正七年には毛利方杉重良が蓑島へ渡り大友方に寝返ったから（正月十八日「毛利輝元書状」萩藩閥閲録二）、この島をめぐり両軍が激しい攻防を続けた（三月七日「大友円斎書状」入江文書／史料纂集）。

蓑島も典型的な海岸堡である。その後の地形改変があったらしく、遺構はみられないと報告されているが、豊前と防長の関係を考える上では重要な軍事拠点だった。むろん建物は建てられていたであろう。

河川内で潮汐の影響を受ける範囲内であれば、海岸堡になると考える。六角川の潮汐限界点にあるおつぼやま神籠石、筑後川の同限界点にほど近い、高良山神籠石は海岸堡であろう。よって中世の征西府拠点、あるいは大友氏拠点となった高良山城も広義の海岸堡である。

名島山と多々良浜

名島城の城山は多々良川河口にある。蒙古襲来・文永の役にて蒙古軍は筥崎宮を焼いているから（『勘仲記』）、後方多々良川干潟にも侵入しただろう。この山も占拠されたと考える。

足利尊氏軍と菊池武敏方が戦った多々良浜合戦の際には、名島山はかならず海岸堡として機能したはずで、当初は菊池側が布陣しただろうが、のち足利尊氏軍が占拠し、勝利したと考える。

永禄十二年（１５６９）五月十八日、大友と毛利との立花山攻城でも、「多々良川御越御陣」（『豊前覚書』）、「多々良浜」（『宗像記追考』）と見える（『大日本史料』当日条、５８８頁、）。多々良浜にて合戦があったのなら、名島山の争奪があったであろう。

警固山＝鳥飼城・福岡城

福岡城は西が樋井川河口で（慶長段階までは、のちの大濠公園に河口）、東が那珂川（御笠川も合流）河口である。近世以前、古代以来の歴史があって、古代には警固所（大宰府西守護所）が置かれて、刀伊の入寇時には攻撃目標とされた（小右記）。また中世には蒙古襲来時には高麗軍（東路軍）の攻撃目標とされて、鳥飼潟周辺にて激しい戦闘が行われた。この警固山は那珂郡と早良郡の郡境にあって、東は警固村、西は鳥飼村に属していた。今川了俊や渋川満直の居城として名前が見える鳥飼城も、この警固山山頂の城を指す。ほかには鳥飼村には探題居城になるような城跡はない。

近世福岡城を築城する際に大がかりな造成がなされて、本丸の広大な平坦地ができた。それ以前には中世城らしい段々の地形があっただろう。警固神社は移転させられたが、若一王子社のみは城内に残り、ほかに警固の藤と呼ばれる

老いた藤が残された。

志賀島

志賀島は蒙古襲来時に蒙古（高麗軍＝東路軍）が占領した。『蒙古襲来絵詞』には、志賀海神社に隣接する山にて警戒する蒙古兵と、海岸に設置された柵列や、海からの通路上の櫓門風な門が描かれている。これも典型的な海岸堡である。

海岸堡は自然の山でも十分に防衛機能を果たしたが、次第に防御機能が恒常化して要塞化していった。

今回報告された多数の城館跡のうち、海岸際の山城や、潮汐の影響を受ける河川に面した山城は、当然ながら海岸堡で、度々の合戦で争奪が行われた。遺構が残りにくいものもあるが、軍事拠点としての枢要性があって、歴史的に重要な役割を果たしてきている。